

李嶠百廿詠注 杓尾 武

一 李嶠傳略解

李嶠(貞觀十九年「六四」開元二年「七一」の傳記は舊唐書卷九十四および新唐書卷一三に詳しまた途唐詩卷三李嶠詩にも要を得た解説が見える。そのほか詩話の類にも興味ある逸話を傳えている。この度には舊唐書の李嶠傳を中心に筆を進めたい。なお李嶠の生没の説については姜亮夫纂定による歷代人物年里碑傳綜述によると唐太宗貞觀十八年「二四」に生まれ唐玄宗開元元年「七一」に七十歳で没している。今は間一多の說にしたがった。

李嶠百廿詠注解題

である。早く父を失い母に孝行であった。子供のころから二本の筆を遺れる夢を見、こゝから文章が作れるようになつた。十五にして五經に通じ、時の重臣薛元超に稱賛され、二十歳で進士に合格し、後に制策に優秀な成績で及第し、長安に赴任した。時に畿内の尉で文章に名のある者として、駱賓王、劉允業がおり、最早少の李嶠は對等にあ遊した。高宗の時、獼猴族の亂があり、詔を受けて軍を監することになつたが、嶠は自から洞に入つて説得して降した。給事中の時、殘虐で知られた來俊臣が獼人、傑等の亂をでっちあげようとしたため、その枉を知りて申べしは、是れを義と見て爲ざる者と謂うなりといつて、無嫌責を證明しようとしたが、則天武后の意に逆ふこととなり、左遷された。後に召し歸され、鳳閣舍人となる。文冊、大號々々を作ることも多かった。

神龍二年(七〇六)中書令となった。中宗の景龍三年(七〇九)に修文學士を加附され、趙國公に封ぜられた。將進の職として、同中書門下二品になった。睿宗が即位すると、懷州の刺史に遷された。玄宗が即位すると、滌州別駕に左遷せられ、後に廬州別駕に改められた。七十歳で卒す。

李嶠は才思に富み、文章を綴るや人々は爭つてそれを傳え、諷誦した。越權の行爲を非難されることもあつたが、それは正義の心に根ざするものであり、やむにやまれぬのであつた。王勃、楊盈川(楊炯)と號を極く、崔融、蘇味道と名を齊し、晩年には諸家没して、獨り文章の宿老として、文を學ぶ者はその手本となすといふ。

李嶠は初唐の人で宮廷詩人として、則天武后時代に名聲を博したが、六朝の殘る香を傳ふる華麗な詩風に

にそれほど新味はなかつたが、世に受け入れられて一時を風靡したのは當時の尙好に合つてゐたからであらう。日本にも平安時代に傳來し、嵯峨、越天皇家とされる斷簡が傳へられてゐる。日本の題詠詩に多大の影響を與へてゐると考えられる。

つぎに唐の玄宗の書いた「奉和聖制」に次のような逸話があるのを引いておこう。天寶の時、玄宗は月に乘じて勤政樓に登り、梨園の弟子(音樂生)に命じて數曲歌かせた。李嶠の詩を唱えらるゝがあり、云々、富貴榮華能く幾時ぞ、山川滿目淚衣を沾す、見ずや^悲今汾水の上。惟年年秋雁の飛ぶありと、時に玄宗は春秋(年數)を已に高かつた。これに誰の詩だとある人が對して、うには李嶠の詩でございすよ、と云つて玄宗はうらりと泣き流した。曲終

らぬそに起ち上ていれらには、李嶠は眞の才子である、又明手蜀に行幸があり、白衛鎮に送り眺覽せしるゝと久しうた。この時あまたの歌詞をうたつた。また玄宗は李嶠は眞の才子であるといつて感嘆に勝えぬようであつた。時に高力士は側に居り、また洋を擲ると久しかつた。この逸話から察するに李嶠の詩に二つの側面を感じることができ、その一は正義の士あるいは政治家として人生をまづめに作歌したものと百廿詠に見られる遊戯としての歌作である。

二 李嶠百廿詠についてそのおもしろい、の源泉

題詠を百廿首分類したこの詩集は右にも述べたように遊戯としての詩がその中心をなす。この題詠詩集の性格は當時流行した類書と似たりが多く認められる。すでに類

李嶠百廿詠注解題

書の所収序説三(成城國文學論集第十輯一六一頁)で述べたごとく、六朝の士大夫の間で知識の多寡を争ひ遊びが流行し、その知識の源泉として類書が珍重されたのである。とも進士にするための受験参考書であるが、その

とが、この遊戯をよけに盛んにしたといえる。

百廿詠とみれば、いづくやらどこであるが、どの句にも必ずといっていいほど典故があることを知るのである。この典故は多量類書の中に發見することである。李嶠は、この一群の詩を、作るのに類書を使ったはずである。李嶠が使った可能性のある類書は北齊の祖璉等が編んだ修文殿御覽三六。

卷、隋末唐初の虞世南の北堂書鈔一六。卷、唐初の歐陽詢等の編んだ藝文類聚一〇。卷等々、考えられ、修文殿御覽は今に逸書であるが、李嶠のこれに存在し、日

本にも傳えられてゐる。逸書となつたといふ、北宋にも賈著
 の手に編まれた太平御覽にはその面目が傳えられてゐると
 いふ参考になる。考へるに類書を利用したかといふ
 ほどよくして、當時の知識階級の教養のものとて意匠
 味がある。

百廿詠のなまじやには句に秘められた故事を發見する
 ことにあつて、今ふのクイズ遊びに類するものである。たが
 てゝの百廿詠注は典故を發見することを最優先とし
 た。

二 書誌について

すでに池田利夫氏が日中比較文学の基礎研究（立
 間書院）に詳細に論じ、筆者も百詠や歌注汲古書
 院で概略を述べておいたので簡略にしておくが、今回底

本とした傳は城本とは同系統の内閣文庫本と古本
 系とするならば、文苑英華本系と全唐詩本系にあつ
 べく分類できる。

古本系では古きでは傳は城本であつて明うかに誤り
 と思ふところがあり、また一方斷間であるが惜しい内閣
 文庫本は同じ内閣文庫に傳わる江戸寫本の百詠
和歌とは近い本であることから、かなり信頼できる本と
 もいえる。

文苑英華本は他の二系統とはやや違つたものであるが
 その注に引く本文及び單邊詩と稱するものは全唐詩
 とは同系のもので漢本系の本と見てはよい。

全唐詩諸家の本文は明版にその原形が求められながらも
 いろいろ形の本文があつたものが後世の偽作かといふか

カ
の
ら

四 注釋書について

百詠和歌の作者である源光行が見た法に張庭芳法の李端公詠である。今、慶應義塾大學圖書館ナヤエの同季本の數種のみが、陽明文庫に別系本がある。かゝるものも後人の手が加わっているように思ひえる。また全唐詩も唐李太白の古本系の延寶版本と對校して注をつけた戸崎允明の李端公詠物語解がある。この書は自筆本で靜嘉堂文庫に藏されて注をつけるに當つて參考にした。また、全唐詩本によつて注をつけている。和刻本として石川眞校點老巨山詠物語があるが注はない。全句にやたらぬが源光行の百詠和歌は重要な注釋書といえる。いずれについても百詠和歌注を參照されたい。

李端公百廿詠法解題

凡 例

- 一 傳嵯峨本李端公百廿詠と内閣文庫藏慶長寫本李端公百廿詠と對校して上段に置いた。
- 一 中段には明版文宛英華所收の本文を置いた。
- 一 下段には全唐詩所收の本文を置いた。
- 一 傳嵯峨本に缺落した部分については内閣文庫本を底本にした。
- 一 中段、下段に上段と異なる本文にかぎって記載した。
- 一 訓み下し文は上段の本文にかぎって行つた。
- 一 引用詩文には左ゆきにも線を引いた。
- 一 中段下段の注も適宜行つた。
- 一 語釋の見出し語の左ゆきにも線を引いた。

ハ 注に引用した文に注をほどいてはあい▲印をつけた。
引用類書には次の略號を用いた。

・北堂書鈔↓書鈔

・藝文類聚↓藝

・初學記↓初

・太平御覽↓御覽

ハ 詩文の引用原典として、主として次のものを用いた。

・文選 六臣注文選

・全上古三代秦漢六朝文

例 全漢文 全晉文

・全漢三國晉南北朝詩

例 全漢詩 全宋詩

・佩文韻府

・全唐詩 光緒版本と標點本とは巻の編成を異にする。前者を用いた。

ハ 百廿詠を五母回十首ずつ十二回に分けて注している。將來數回分をまとめて注することもある。

ハ 參考文獻は松尾武編百詠和歌注(汲古書院一九七九)及び池田利大著日中比較文學

の基礎研究(立間書院昭和四十九年)を參照。

<p>23 竹 22 菊 21 蘭 20 芳學十首 19 洛河 18 江海 17 道 16 田野 15 原 14 石</p>	<p>李子嶠百廿詠注目次</p> <p>11 山 坤儀十首 10 雪 9 雨 8 露 7 雲 6 煙 5 風 4 星 3 月 2 日 乾象十首</p>
<p>47 鷺 46 鳬 45 雁 44 鵲 43 烏 42 鵲 41 鳳 靈鷲十首 40 橘 39 梅 38 梨 37 李 36 桃</p>	<p>35 桐 34 柳 33 槐 32 桂 31 松 嘉樹十首 30 荷 29 茅 28 瓜 27 菱 26 萍 25 萱 24 藤</p>
<p>70 服玩十首 69 車 68 舟 67 橋 66 池 65 宅 64 井 63 市 62 門 61 城 居處十首 60 兔</p>	<p>59 羊 58 鹿 57 熊 56 豹 55 牛 54 馬 53 象 52 麟 51 龍 祥獸十首 50 雀 49 燕 48 雉</p>

<p>94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83</p> <p>箭 弓 刀 劍 武 墨 硯 筆 紙 檄 書 賦 詩</p> <p>器 十 首</p>	<p>82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71</p> <p>史 經 文 酒 燭 扇 鏡 被 屏 簾 帷 席 床</p> <p>物 十 首</p>
<p>718 717 716 715 714 713 712 711 710 709 708 707</p> <p>綾 羅 錦 錢 銀 金 玉 珠 玉 舞 歌 笙 笛</p> <p>帛 十 首</p>	<p>106 105 104 103 102 101 100 99 98 97 96 95</p> <p>鐘 簫 箏 瑟 琴 章 彈 戲 戈 旗 旌 弩</p> <p>樂 十 首</p>
	<p>720 719</p> <p>布 素</p>

百廿詠法 一

乾象十首 日月星風雲煙露霰雨雪

日出扶桑路 文日 26
日出扶桑路 金書 300a
日出扶桑路

遙昇若木枝

雲間五色滿

霞際九光披

東陸蒼龍駕

南郊赤羽馳

傾心比葵藿

朝夕奉堯曦

朝夕奉堯曦 文書 300a

庭日日出扶桑路 遙かに昇る若木の枝 雲間に五色

満ち霞際に九光披らく 東陸に蒼龍駕し 南郊に赤

李嶠百廿詠注 日

羽馳す心を傾けて葵藿に比せば 朝夕に堯曦に奉ぜん

扶桑 東海中にあるといふ木、まに東方にあるといふ國、日

の出入るといふ、けし洲記 扶桑は頭石海之中、地方萬

里、上有太帝宮、太真東王父所治處、地多林木、華

皆如桑、又有樹、長者數千丈、大二十餘圍、樹兩

同根、偶生、更相依倚、是以名爲扶桑、仙人食其樹、

而一體皆作金色、光飛翔空、其樹麗大、其葉檀、

故規中夏之桑也、但摧掩而色赤、九千歲一生實、

耳味絶甘、香美、古今逸史、御覽九五九、淮南

子、天文訓、日出於暘谷、谷于咸池、拂于扶桑、是

謂晨明、暘于扶桑之上、爰始將行、是謂朧明、至于

曲阿、是謂朝明、臨曾泉、是謂晝食、次于桑野、是謂

晏食、饑于餓、陽是謂禺中、對于比玉、是謂正、中、麻

于鳥次西鳥馬大歟是謂小遷至于非谷是謂眺時起于女紀是謂大遷經于泉陽是謂高者古城于連石是謂下其鳥御傳流御邊三作六辨誰隨于天文篇作其馬是謂懸車于虞泉是謂黃昏淪于蒙谷是謂定宮一御傳三所者畢同于▲太真地名思之不明▲東王父女仙の王西王母

に對して男山の王神異經長一丈頭髮皓白人形鳥面而虎尾載一黑熊左右顧望恆與一玉女投壺東荒經百子金書▲榧樹榧樹の實扶聚に同二兩樹同根たかによりそうに生ている▲空を空を大空の意也根▲中夏中國人が自國を稱する尊稱（班固漢書賦）▲陽谷東のはて日出るところという▲咸池離騷遠注咸池日浴處也▲晨明あけた▲朧明高誘注朧明

將明也▲曲阿御覽注曲阿山名▲朝明今本旦明高誘注平旦▲曾泉御覽注曾重也早食時任東方多水之地故曰曾泉▲晝食蚤早也早安食の晏おそいことに對す▲衡陽衡平也太陽が平らになるところ▲閬中今本陽中平干になつとすると▲昆吾御覽注昆丘在閬方▲正中まひる▲鳥次高誘注鳥次西南之山名也鳥所宿止▲小遷今本作小還▲非谷高誘注非谷西南方之大壑言其深峻臨其上令人非思也故曰非谷▲眺時今本作眺時申の刻午後四時也▲女紀高誘注女紀西北陰地▲大遷今本作大還▲衆閭今本淵慶地名▲高誘午後四時高誘注戎氏離騷時也▲連石高誘注西北山名將欲下之家自心也故曰下春▲其鳥太陽の精は鳥▲是謂懸車

淮南子註達古法御覽此四句引作爰止爰和爰自六
 端是謂繼車まに雙行で日乘車駕以六龍義和御
 之日至此而薄於虞泉義和至此而廻六端即六
 龍也。▲虞泉今本作虞淵。凌澌遠遊遂注虞淵日
 所入也。廣雅釋詁二虞望也。儀禮既夕禮三虞鄭
 玄注虞安也。▲蒙谷高誘注蒙谷北方之山名也。遂
 古注蒙谷即洵書昧谷蒙昧聲相通。今本定啓
 入づけて日入于虞淵御覽泉之出。曙于蒙谷之浦。
 とあり。御覽一異同アリ。

12 ●若木 日の没するところにあといふ木。山海經海內經之南
 海之外黑水青水之間有木名曰若木。梢赤華青。
 若水止焉。凌澌離騷飲余馬於咸池兮。攬余轡
 乎扶桑。折若木以拂日兮。遂注若木。若崑崙西

李嶠百廿詠注 日

極其華照下地排擊乎也。淮南子墜形訓若木在
 建木西末有十日其華照地。高誘注曰末端也。若
 木端有十日狀如連珠華光照其下也。梁李鏡
 遠詠曰詩崑崙東嶺。俄升若木枝。○建
 木淮南子墜形訓建木在都廣。鄭玄注建木其
 狀如傘引又有實若懸黃蛇其若盈綰都廣南方
 山名也。注又又山海經海內南經三見之

13 ●雲間 五色滿禮斗威儀踆太平則日五色。潞經
 援神契日神五色明照四方。以上御覽三。五色とは
 青黃赤白黑の五種の正色。書經尚書疏この五
 色は五行の色でもある。

14 ●霞際 九光披尚書考靈輿日有九光光曜四極
 十州記崑崙山之上有環華之室紫雲丹房景雲

房神仙の居所。▲朱霞朝やけ夕やけ。
2.5 東陸 易通統圖 日春行東方青道(東陸)御覽

春、南陸謂之夏、東陸謂之秋、蒼龍東方の七宿

輔黃圖（また青色の大馬）禮記月令天子居青陽左个（来）鸞路鸞倉龍▲青陽明堂の東方の堂名。▲

刻した鑲鳥の口に鈴をつけた車。
①●南郊 古、南の所は、夏至の日に天子を祀った。●赤羽

赤鶴とてい、太陽の異稱、日中には二足の鳥がいたとす。

皇覽 逸禮 夏則乘赤輅駕赤鴈戴赤旗以迎夏
於南郊（御覽三）孔子家語致思由顓得赤羽者

げ
① 家^カ 寶^{ホウ} ひまわ^{マワ}り。曹^{ソウ}植^{シツ} 求^{モト}通^{ツウ}親^{シン} 魏^{エイ}表^{ヘイ} 石^{シツ} 安^{アン} 曜^{ヨウ}之^ノ 傾^{カガミ} 欒^{ラン}。

之者誠也也蓋曰淮南子說林訓曰聖人之於道猶葵之與日雖不能終始誠其終始者誠也也夜日葵

誠心也。卷三臣竊自比葵藿。葵藿宋書彭城王義康傳敢仰慕之心。仰慕周易匪躬之志。故不遠六

況我殘病，志在朽木，攬眼前（全梁詩五）▲殘霞老志已暮

わが太陽に傾き向うように君まや長よを仰ぎ慕うこと。
 1-8 ●老臈 恩恵ゆたかな日の光。一本光暎に作る。

月 遞

1^a 桂生三五夕2^a 冀開二八時3^a 分暉度鵲鏡4^a 流影入蛾眉5^a 皎潔臨疎牖6^a 玲瓏鑒薄帷7^a 願陪北堂宴8^a 清夜幸同嬉1^b 桂生三五夕2^b 冀開二八時3^b 分暉度鵲鏡4^b 流影入蛾眉5^b 皎潔凌疎牖6^b 朦朧鑒薄帷7^b 願陪北堂宴8^b 長賦西園詩1^c 桂滿三五夕2^c 清輝飛鵲盤3^c 新影學蛾眉4^c 願言從愛客5^c 長賦西園詩

李 嶠 百 廿 詠 注 日 月

「嗟桂は生る二五の夕」冀は開く二八の時 暉を分り鵲
 の鏡を度たり 影を流して蛾眉に入る 皎潔として疎牖
 に臨み 玲瓏として薄帷を鑒らす 願くは北堂の宴に陪
 りて 清夜幸に嬉むを同じくせん

2¹ ●桂生三五夕 三五は十五夜、月の桂ともいわれるように桂
 は月に生えたる、古詩十九首二五明月滿西五簾卷珠
 (又選三九)慶喜安天論俗傳月中、仙人桂樹今視
 其初生、氣仙人之足漸已成形、桂樹後生焉、初生
 酒陽維俎 天咫舊言月中有桂有蟾蜍、蟾蜍舊言月、
 桂高、五百丈、下有一人常斫之云々或言月中蟾桂、
 地影也、空處水影也、此語幾近、尸子春華秋榮曰、
 桂、▲簾卷簾は簾之通用字、卷之蟾跡はすれも月の精、

四九(二十日)に至りて月(鷹兎)が缺けり。蟾蜍(カ)の毒の恒(楊)娥は夫が西王母からもらった不死の藥を盗んで月へ奔り蟾蜍になつたと云れる(淮南子)また月中に兔が棲む話に楚辭(天問)や傅咸の擬天問にみえり。

●賞開二八時 冥は觀(美)といふ瑞草。堯の時(生えたい)中秋の月(一日)から十九日まで(一日)毎(日)一莖(す)生え十六日(一日)から月(未)までは一莖(す)つ落(ち)る。小の月(一莖)枯れて落(ち)ちなびといふ。これによつて曆を作つたといふ。浙書紀年(帝堯陶唐氏帝在位七十年)又(有)草(夾)階(而生)月朔始(生)一莖。月半(而生)十五莖。十六日以後(日)落一莖。及晦(而生)月(小)則一莖焦而不落。名曰(冥)莖。一曰、曆(莖)白虎通(德論)封禪(天下太平)德(冥)地(即)嘉禾生(冥)莖(起)日曆得(其)分(即)黨(莖)生(夾)階(間)冥

莖者樹名也。月一日一莖生。十五日畢。至十六日一莖生。故(堯)階(而生)以明日月也。王藝九十八祥瑞

孫氏瑞應圖(莖莖者葉圓而五色)一莖曆莖。十五葉日生。一莖從朔至望畢。從十六日毀一莖。至晦而盡。月小則一莖卷而不落。聖明之瑞也。人(堯)德合乾坤則生(御覽八十三(葉莖))

23 ●分輝度鵲鏡 鵲鏡は鏡の背に鵲の形と鑄たもの。神異經の故事にもづく。神異經昔有大婦將別。賦鏡人勸(半)以爲信。其妾與人通。其鏡化鵲飛至夫前。其夫乃知之。後人因鑄鏡爲鵲。安背上。自此始也。御覽七十三(鏡)本事詩情感。陳太子舍人徐德言之妻。後主叔寶之妹。封樂昌公主。才色冠絕。德言爲太子舍人。方巖時。亂。死。不相保。謂其妻曰。以君之

才容國上以入權豪之家斯永絕矣儻情緣未斷猶冀相見宜有以償之乃破一鏡各執其半約曰他日以正月望實於都市我當在卽以是日詒之及陳亡其妻果入越公楊素之家寵愛殊厚德言流離辛苦僅能至京遂以正月望訪於都市有蒼頭賣半鏡者大高其價人皆笑之德言直引至其居受食見其故出半鏡以合之乃題詩曰鏡與人俱去鏡歸人不歸無復婦嫗聚空留明月輝陳氏得詩涕泣不食素知之愴然改容卽召德言還其妻仍厚遺之聞者無不感嘆仍與德言陳氏偕飲公陳氏爲詩曰今日何遽次新官對舊官文晦俱不取方驗作人難遂與德言歸江南竟以終老(廣記一六六楊素)▲越公楊素隋之高祖に従い功

李崎百廿詠注 月

續あり越國公に封せらる▲蒼頭奴僕をいふ▲婦城の注
参照▲遽次官吏の仕免

●流影月のかげをよまず、または流影と讀んで流れに映ったかげ
劉宋鮑照代客熱行含沙射流影吹蠶病行暉(塗綵詩四梁府集卷五題諸熱行)●城眉城は城に通用、城眉山をいふ、李白の城眉山月歌でも有名な山、蜀(四川)省、城眉縣の西南、その形が齊齋のまゆ(城眉)に似てからという、李白の詩に後のものであるが引いておく、城眉山月半輪秋、影入平蒼江水流、夜發清溪何三城、思君不見下渝州、梁何子朗和繆郎城月(漢文續聚月并虞賓詩)冷泠、琴瑟玉潭水、映見城眉月(眉のような月の意)▲狂蔓新綠まへこの句の意は水に映っている月がひかりを流して城眉山に入っていく、狂蔓の城眉と城城眉山と

れあか

25 ● 皎潔臨疎牖 皎潔はあきらかにきらきらし。劉宋謝靈運

運 澄澗月 賦 浮雲 襄 兮 收 泛灝 明舒照兮殊皎潔

(初月) 晉潘岳悼亡詩 依依窗中月 照我室南端 疎

牖 口こゝとて 潘家支序ニト 居に疎牖低檐向月斜

▲ 泛灝 泛字初學記 汎に作ル。今 逢源 泛によつて改めた水

面に反射する光 浮光 ▲ 明舒 月の光であらう。句意は月

の白い光が清々にこころまどにぞして

26 ● 玲瓏照金薄惟 玲瓏は月の光がさそひてあややかに。薄

惟はうすといはし。魏 阮瞻 詠懷八十二首之一 夜中不能寐

起坐彈鳴琴 清惟照明月 清風吹我襟 (初月) 登臺

阮惟 泛灝ニミ (陳張正見 清惟照明月 窗外光恒滿

惟中影暫流 (初月) 梁沈約 八詠詩 登靈臺望秋月

27 ● 玲瓏照北堂 北堂は大學字彙の文章院 北堂書鈔

の陶九成序に北堂者省之後堂といへる 陸機 擬

古詩 擬明月何皎皎 安寢北堂上 明月入我牖

(初月) 泛灝ニミ (二善清行) 八月十五夜同賦 皎

秋月明 晉月玲瓏 催北堂之賞玩者 ▲ 晉月晉

の陸機の擬古詩をふまえていふ。北堂之賞玩も同じ ▲ 玲

瓏 みの注に引く沈約の泛灝秋月が上巻にある。

28 ● 清夜幸同嘉 魏曹植公藏詩 清夜游西園 飛靈

相追隨 月澄清焉列宿正參差 (初月) 泛灝ニミ 山

43

四 二方 秋 日 於 長 王 宅 宴 新 羅 客 請 臨 西 園 之 遊
 燕 陳 南 浦 之 送 懷 風 藻 ▲ 西 園 魏 之 武 帝 の 園 の 名
 河 南 省 臨 漳 縣 の 西 に あ っ た 李 子 嶠 二 方 と も に 昔 植 詩 を

3 望 屋 隱

蜀 郡 靈 接 轉

之 豐 城 寶 劍 新

將 軍 臨 北 塞

天子 出 西 秦

天子 入 西 秦

天子 入 西 秦

未 作 二 公 輔

寧 爲 五 老 臣

寧 爲 五 老 臣

寧 爲 五 老 臣

今 月 潁 川 曲

誰 識 聚 賢 人

b

詠 星

152b

c

星 340a

李 子 嶠 百 廿 詠 注 月 星

隱 蜀 郡 靈 接 轉 豐 城 寶 劍 新 將 軍 北 塞
 に 臨 み 天 子 は 西 秦 に 出 づ い ま た 二 公 の 輔 だ ら ず 空 し く
 五 老 の 臣 た ら む 今 月 潁 川 の 曲 に 誰 が 識 ら む 賢 人 の 聚

る こと を

蜀 郡 靈 接 轉 蜀 郡 は 秦 の 北 四 川 省 成 都 縣 に
 嚴 若 平 と い っ と 筵 の 大 家 が い て 大 河 に 行 っ て き た 男 の 行 動

も 證 明 し て み せ ろ 靈 接 接 は あ る 男 が 大 河 に 乗 っ て 行 っ た い う
 け だ 晉 侯 華 傳 物 志 舊 說 云 天 河 與 海 通 近 世 有 人

居 海 濱 者 年 年 八 月 有 客 從 去 來 不 失 期 人 有 奇
 士 立 飛 閣 於 查 上 多 麗 羅 葉 提 而 去 十 餘 日 中 猶

觀 星 月 日 底 自 後 茫 茫 物 忽 泐 亦 不 覺 晝 夜 去 十 餘
 日 奄 至 一 處 有 城 郭 狀 屋 舍 且 嚴 逸 逸 宮 中 多 織

婦 見 一 丈 夫 牽 牛 者 次 飲 之 牽 牛 人 乃 驚 問 已 何

由是此此、人見說來意并問、此是何處答曰、君還至蜀都說、嚴君平則、如之、意不卜、岸因還如期、後至蜀問、君平曰、某年月日、有客星犯牛宿、訃手月、正是此人到天河時也、(指上母孛、入等所收)隕淋昔有一人、尋河渚、見婦人流涕、以問之、曰、此天河也、乃與一石而歸、問、嚴君平、云、此織女支機石也、(御覽八選)唐宋之問、明河篇、明河可望不可親、願得乘槎、一問津、更將織女支機石、還詠成都賣卜、人、家渚、六博、望尋河、徐子光補註、家渚、舊注云、得支機石歸、未詳所出、張騫、尋河渚、合成立、もの考を以て、宋代の歲時廣記ニ于て得機石、は原荆楚歲時記に見えぬ張騫傳説を引いて、漢武帝、令張騫

伐大夏、尋河源、乘槎經月而返、一處月城郭、如官府、室內有、一女、織、又見一丈夫牽牛飲河、騫問曰、此是何處、答曰、可問嚴君平、織女取槎機石與騫、而還、後至蜀問、君平、君平曰、某年月日、客星犯牛女、所得、槎機石、爲東朔所識、懷風藻、藤原史遊古野靈仙駕、馳去、星客乘雲、遊、官家文章、六休仙詞寄、託浮真問、工都海神投與、一明珠、今皆物語、十漢武帝以張騫、令見天河水上語第四、▲支機石織女のはたと支えら石槎機石に同じ、▲賣卜、うらないな、いとする、高士傳、嚴遵、嚴遵、字君平、蜀人也、隱居不仕、常賣卜於成都市、日得百錢、以自給、如卜詒則、問、辭、下、簾、以者、言爲事、(四部備要)豐城寶氣新、豫章、江西省、豐城の地に龍泉、太河

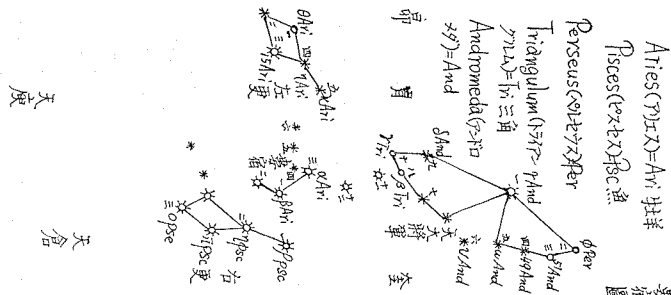
の二名劍が理もれていて、光を發して天に徹して斗牛の間に常
に紫氣があつたといふ故事、雷次宗豫樟^{（記）}吳木^{（上）}に^{（注）}有^{（る）}。
紫氣^{（紫）}身^{（身）}斗^{（斗）}之間^{（間）}、張華^{（張）}聞^{（聞）}雷^{（雷）}孔章^{（孔）}、妙達^{（妙）}緯^{（緯）}象^{（象）}乃^{（乃）}安^{（安）}。
宿^{（宿）}問^{（問）}「大^{（大）}丈^{（丈）}孔^{（孔）}章^{（章）}曰^{（曰）}：「惟^{（惟）}斗^{（斗）}之間^{（間）}有^{（有）}異^{（異）}氣^{（氣）}是^{（是）}寶^{（寶）}物^{（物）}也^{（也）}。
精^{（精）}在^{（在）}豫^{（豫）}章^{（章）}豐^{（豐）}城^{（城）}張^{（張）}華^{（華）}遂^{（遂）}以^{（以）}孔^{（孔）}章^{（章）}爲^{（爲）}豐^{（豐）}城^{（城）}令^{（令）}子^{（子）}縣^{（縣）}掘^{（掘）}。
漆^{（漆）}二^{（二）}丈^{（丈）}得^{（得）}玉^{（玉）}匣^{（匣）}長^{（長）}八^{（八）}尺^{（尺）}開^{（開）}之^{（之）}得^{（得）}二^{（二）}劍^{（劍）}其^{（其）}斗^{（斗）}牛^{（牛）}氣^{（氣）}
不^{（不）}復^{（復）}見^{（見）}孔^{（孔）}章^{（章）}乃^{（乃）}留^{（留）}其^{（其）}一^{（一）}匣^{（匣）}而^{（而）}進^{（進）}之^{（之）}劍^{（劍）}至^{（至）}光^{（光）}曜^{（曜）}焯^{（焯）}時^{（時）}。
燄^{（燄）}若^{（若）}電^{（電）}發^{（發）}後^{（後）}張^{（張）}華^{（華）}遇^{（遇）}害^{（害）}此^{（此）}劍^{（劍）}飛^{（飛）}入^{（入）}襄^{（襄）}城^{（城）}水^{（水）}中^{（中）}孔^{（孔）}章^{（章）}
臨^{（臨）}之^{（之）}戒^{（戒）}其^{（其）}子^{（子）}恆^{（恆）}以^{（以）}劍^{（劍）}自^{（自）}隨^{（隨）}後^{（後）}其^{（其）}子^{（子）}爲^{（爲）}建^{（建）}安^{（安）}從^{（從）}事^{（事）}經^{（經）}
淺^{（淺）}潮^{（潮）}劍^{（劍）}忽^{（忽）}心^{（心）}於^{（於）}腰^{（腰）}間^{（間）}躍^{（躍）}出^{（出）}遂^{（遂）}視^{（視）}見^{（見）}二^{（二）}龍^{（龍）}相^{（相）}隨^{（隨）}焉^{（焉）}。晉^{（晉）}書^{（書）}
張^{（張）}華^{（華）}傳^{（傳）}に二^{（二）}の劍^{（劍）}の^{（の）}名^{（名）}を^{（を）}龍^{（龍）}泉^{（泉）}と^{（と）}大^{（大）}阿^{（阿）}と^{（と）}す。豫^{（豫）}章^{（章）}に
雷^{（雷）}煥^{（煥）}送^{（送）}劍^{（劍）}と題^{（題）}して^{（して）}晉^{（晉）}書^{（書）}を^{（を）}注^{（注）}として^{（として）}引^{（引）}く。豫^{（豫）}章^{（章）}記^{（記）}は^{（は）}藝^{（藝）}文^{（文）}類
聚^{（聚）}初^{（初）}學^{（學）}記^{（記）}の劍^{（劍）}の^{（の）}部^{（部）}に^{（に）}引^{（引）}かれ^{（れ）}が、晉^{（晉）}書^{（書）}は^{（は）}引^{（引）}かれて^{（て）}い^{（い）}ない。伏^{（伏）}評^{（評）}。

李嶠百廿詠注 星

御覽劍には晉書を引く。

將軍臨北塞 將軍は塞宿の天大將軍星をさすであら
う。晉書天文志天將軍十二星在塞北主武兵中
央大星天之大將也。北塞といふのは塞宿の北側にあつ
て守りをつかたぬ天大將軍をいふ。

星宿圖



天鹿

天倉

34 ●天子出西秦漢書一上高帝紀五里聚于東北沛

公至霸上汪應劭曰東井秦之分野五里所在其
下當有聖人以義取天下御備七瑞皇引漢書高
祖初八闔五里聚於東井秦分野▲五里五行星
水星火星土星金星水星五里聚東井とは秦が滅
亡し漢が起ることを豫言した故事日月合璧ともに瑞祥
とされた▲分野戰國時代の天文家が中國全土を二十
八宿に配分した句中出字は内閣文庫本のごとく入字
にすべきである

35 ●未作ニ公輔紫微星と守る二つの星をニ公といふ上
台星中台星上台星煇諸天文志ニ公ハ星兩兩
而居起文昌列抵太微一曰天柱三ハ之位也左
入曰三ハ在天曰ニ公▲紫微星垣ニ天帝の居所

36 ●空爲五老臣五老は五里の精論語織仲尼曰吾

聞堯率舜等遊首止觀河諸有五老遊河渚一老
曰河圖將來主帝期二老曰河圖將來主帝謀三
老曰河圖將來主帝事四老曰河圖將來主帝圖
五老曰河圖將來主帝符龍銜玉苞金泥玉檢封
盛書五老飛爲流星上入昴(御覽五里)▲河圖

易の卦のものになる圖伏羲のとき黃河から現れた龍馬の背月
書かれていた唐經顧命傳河圖八卦者伏羲氏王天
王龍馬止河遂則其文以畫八卦謂之河圖

38 ●今省潁川曲誰識聚賢人後漢書十三陳寔傳
陳寔字仲弓潁川許人也懷冰陳寔遺盜檀
道鸞續晉陽秋陳仲弓從諸子遊遂荀李和父子
于時德星聚大史表五百里內有賢人聚初星賢

はうきあから意

43 ●帯は疑鳳舞 帯はは風が花を身に帯びる意それがあた

かも鳳凰の舞がうたがれらというのであ、陳張正見風生翠

所裏應教詩金風起燕翻翠竹尖梁池翻花疑鳳

下、腸水健龍形、張謂謫鄭伯璽定詩曉風催鳥

轉、春雲將化飛、全唐詩一九一、于武陵詩和風和

蝶帶花移、佩文韻府拾遺四帶花移、吳均山

賦上被繁華而煙生條帶華化而來雲、續文總載山

▲張謂唐天寶二年の進士、玄宗皇帝のころの人、于

武陵は唐の武宗の會昌のころの人、いずれも李嶠より後世

の人である。

44 ●同竹似龍吟 向竹とは風が竹に何って吹くという意、

の音色が龍の鳴くのに似ていというのであ、龍吟は笛の音色

が龍の鳴くかときまう、後漢馬融長笛賦龍鳴水中

不月已、竹吹之聲相飢、續四十四首、梁劉孝先

竹詩誰能製、長笛聲意吐、龍吟、續八九竹

45 月彩臨秋扇 月の光が秋にそでうち捨られた扇に射し

をい、秋扇は班婕妤の怨歌行の故事より寵を失った女

性にたとえられる、また單純に秋のおきとしてもよい、唐褚亮

清和望月應魏王敬詩層軒啓啟月、流照滿中天

洛影臨秋扇、虛輪入夜盈、全唐詩三十三、梁元

帝鍾山飛流寺碑雲聚峯高風清鍾徹月、如秋扇

花、疑春雪、續七十六、內典、班婕妤怨歌行新列卷四

幼素鮮繁、如霜積雪、裁成合歡扇、團圓似明月、續

六十九扇、▲褚亮は太宗の秦王の時より仕えていた人、

46 松聲入夜琴 松吹く風の聲が夜琴でも琴の音色にま

の音色が龍の鳴くのに似ていというのであ、龍吟は笛の音色

の音色が龍の鳴くのに似ていというのであ、龍吟は笛の音色

の音色が龍の鳴くのに似ていというのであ、龍吟は笛の音色

の音色が龍の鳴くのに似ていというのであ、龍吟は笛の音色

の音色が龍の鳴くのに似ていというのであ、龍吟は笛の音色

の音色が龍の鳴くのに似ていというのであ、龍吟は笛の音色

の音色が龍の鳴くのに似ていというのであ、龍吟は笛の音色

の音色が龍の鳴くのに似ていというのであ、龍吟は笛の音色

の音色が龍の鳴くのに似ていというのであ、龍吟は笛の音色

の音色が龍の鳴くのに似ていというのであ、龍吟は笛の音色

べりあて調和をむすをいう。人はまじる意。松の響きは淨淨
 として夜奏する琴の音色に似るといふ。唐・僧皎然「獨入
 松歌繆集曰風入松晉稽康所作也。西嶺松聲落
 日秋。千枝萬葉風飈飈美人援琴弄成曲寫得如
 間聲斷縈聲斷縈清我魂流波憶陵安足歸美人
 夜坐月明裏含少商兮照清微風何淒兮飄飈攬
 寒松兮又夜起夜未央曲何長金徽更促聲澹波
 何人此時不得意意若何非心聞客堂（樂府詩集）
 琴曲歌辭又全唐詩八二）▲琴集いかなる本かはさし
 ない▲稽康魏の人魏地景元三年（二六〇）死風入松の
 作に今見えないうた選六に琴賦あり▲鼈鼈そよかせ
 少商琴の古律の名帝江世紀神農作琴文王爲其
 少宮小商鼈鳳以定律（書鈔）七制作）▲清微清く

李嶠百廿詠注 風 雲

澄んで微の音微は五音（宮・商・角・徵・羽）の一▲飄聽飄
 はひらひらと、聽は疾風のおと。▲金徽琴の名。▲泑泑響か
 長く餘韻をもつこと。隋阮卓賦得風詩高風應爽節
 搖落灑疎林吹霜飛鴈斷陸谷曉松吟屋葉涼秋
 扇恆飄清夜琴冷隨列子彌諧逸豫心▲高風
 高といふを吹く風▲發節とわかな李節秋▲列子
 莊子逍遙遊子列子御風而行冷然善旬五日
 而後返司馬彪注曰：御迎也冷然涼貌也（御
 風列子御）▲逸豫あまたのしむ

四●若王蘭臺下還拂楚王襟 宋玉風賦 楚襄王
 遊於蘭臺之宮宋玉景差侍有風颯然而至王乃
 披襟而當之曰快哉此風寡人所興庶人共之者邪
 （法選）又選（風）

5 雲(通)	1a 大梁白雲起	2 亭々殊未歇	3 錦文觸石來	4 葦影凌天發	5 氤氳萬年樹	6 掩映三秋月	7 會入大風歌	8 從龍赴員闕	9 嵯大梁に白雲起り亭亭として殊にいたけす錦の建	は石に觸れて來り葦の影は天を凌いで發る氤氳たり萬年	の樹掩映す三秋の月 會大風の歌に入らば龍に従ひ	て員闕に起たむ
5 雲(通)	1a 大梁白雲起	2 亭々殊未歇	3 錦文觸石來	4 葦影凌天發	5 氤氳萬年樹	6 掩映三秋月	7 會入大風歌	8 從龍赴員闕	9 嵯大梁に白雲起り亭亭として殊にいたけす錦の建	は石に觸れて來り葦の影は天を凌いで發る氤氳たり萬年	の樹掩映す三秋の月 會大風の歌に入らば龍に従ひ	て員闕に起たむ
5 雲(通)	1a 大梁白雲起	2 亭々殊未歇	3 錦文觸石來	4 葦影凌天發	5 氤氳萬年樹	6 掩映三秋月	7 會入大風歌	8 從龍赴員闕	9 嵯大梁に白雲起り亭亭として殊にいたけす錦の建	は石に觸れて來り葦の影は天を凌いで發る氤氳たり萬年	の樹掩映す三秋の月 會大風の歌に入らば龍に従ひ	て員闕に起たむ

5 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通)

1a 大梁白雲起 大梁は雲のやうに。歸藏有白雲出山

2 亭々殊未歇 亭々は高くそびえ立つ。嵇文

3 錦文觸石來 錦文はにぎやかな色どりのある雲すなわち霞

4 葦影凌天發 葦の影は天を凌いで發る

5 氤氳萬年樹 官名光遠古

6 掩映三秋月 掩映三秋月

7 會入大風歌 飛感高歌發

8 從龍赴員闕 威加四海回

9 嵯大梁に白雲起り亭亭として殊にいたけす錦の建

5 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通) 雲(通)

1a 大梁白雲起 大梁は雲のやうに。歸藏有白雲出山

2 亭々殊未歇 亭々は高くそびえ立つ。嵇文

3 錦文觸石來 錦文はにぎやかな色どりのある雲すなわち霞

4 葦影凌天發 葦の影は天を凌いで發る

5 氤氳萬年樹 官名光遠古

6 掩映三秋月 掩映三秋月

7 會入大風歌 飛感高歌發

8 從龍赴員闕 威加四海回

9 嵯大梁に白雲起り亭亭として殊にいたけす錦の建

觸石とは雲石にふれて起ることをいふ。春秋說題辭雲之爲言運也。動陰路觸石而起謂之雲（初一雲觸石）

尚書大傳五岳皆礪石而出雲（礪）雲（礪）晉成
於定去風仰散歸雲四旋：或榮爛綺

蘇若畫若親繁縟成文一續一離或綴文錦章（二）一雲文纒一雲（左思）蜀都賦鰓石吐雲（三）善曰春

嶺南落は東方の大、また大、唐詩解注、渡人經、道言昔於

始青^始天中^始瑤落^始空^始歌^始汪^始東^始方^始策^始一天有^始瑤^始名^始霄^始遍^始遊^始

李季嶠百廿詠注 雲

起之は周易雲從龍(潜一雲易經文言傳の語)
●蓋影渡天發(蓋は津のおい、雲の形のとぞ、漢武帝)

故事白雲爲客(漢一雲)魏志文帝生於沛國淮陰郡時有雲氣青色而圓如車蓋(漢一雲)渡天(天

とくづ、高いさぞう、阮籍丈人先生傳浮霧渡天句
意は車蓋のようは雲か天を渡りて登る青山は青々とした

論 文王遇姜公於渭陽（一）孰名（二）而釣（三）文王得之（四）內（五）於（六）君（七）

披雲而見日曰**寶窟**石門寶窟而樹青山▲姜ハム姜后をい、召尚、太ハ望▲渭陽渭水の北、太ハ望サニテ釣

●氤氲 万年樹 氤氲の沈約詩参照。万年樹は

常歸養の總稱と考えられ、かゝる二つに於て既に言フカと云

崑山の樹ぞす。崑山は昔時の崑崙山で、今のそれではない。
 晉宮閣名華林園有萬年樹十四株(御覽九五萬年) 崑山名妙三ノ木 價價 澹澹 曜曜 云云 檀檀 音音 薑薑 加加 名名 加加 之之 萬
 年年 木木 也也 烟烟 溫溫 元元 氣氣 萬物の根源と云う。氣氣 溫溫 元元 氣氣 同義。
 晉陸機泊雲賦擲神 歸歸 於於 八八 垓垓 公公 洪洪 化化 乎乎 烟烟 溫溫 元元 氣氣
 宇宙以攝攝 象象 動動 元元 氣氣 而而 齊齊 動動 雲雲 八出八
 荒荒 荒荒 紆紆 地地 はこの意 ▲法化 大いなる教化。官名黃帝
 は雲をもつて役所に名をつけたことと云う。伏氏伏氏 摯摯 昭昭 公公 十
 七年秋七年秋 姬子曰姬子曰 黃帝以雲紀官故為雲師而雲名雲名
 蘇蘇 雲雲 ▲雲雲 師師 黃帝の時の時 官名官名 時時 に雲雲 の瑞瑞 があつた
 ので役所の長を雲師と名づけた。遼古と云い昔大昔。
 掩映二秋月 掩映は雲が二秋の美しい月をおおいかく
 すことをいふ。蘇蘇 壯壯 和和 元元 日日 雲雲 仕仕 應應 詔詔 詩詩 掩映順雲雲 懸懸

搖搖從風從風 揮揮 全宋詩三通玄真經 文子文子 上德篇
 日月欲明浮雲 蓋蓋 之之 兼兼 蔽蔽 蘭蘭 欲欲 秀秀 秋風秋風 敗敗 之之 御御 廣廣
 四月月 蓋蓋 影影 蓋蓋 參照參照 敗敗 はてらす意。輕輕 煖煖 かるい。り。
 會會 入入 大風歌大風歌 たまたま大風の歌聲に雲雲 が乗乗 るどが
 できたならばの意。大風歌は漢の高祖が淮南王淮南王 酈布酈布 を
 撃つて、故郷の沛を過過 ぎるとき、故舊親族と酒宴をほつて
 詠った歌。大風起兮雲飛揚威加 海內兮歸故鄉 故鄉
 安得猛士兮守四方初 一雲雲 沛歌飛威 高高 歌發
 この句句 大風歌大風歌 にもとづ。
 從從 龍龍 起起 員闕從龍 雲雲 は龍龍 によつて起る。易經 文言
 傳雲從龍 風從從 虎虎 初初 一雲雲 從從 龍龍 起起 赴赴 之之 云々云々
 である。員闕はまる屋根の宮殿。魏曹植又贈丁儀王
 綏員闕出浮雲承露盤 泰清文選 二四金闕 は天

子の宮闕道家では天帝の宮殿、神異經東北大荒
 中有金闕高宮丈中有金階兩闕名天門威加四
 海同之次風歌參照

6 煙 煙 煙

1^a 瑞氣凌丹闕

2^a 空濛上翠微

3 迴浮雙闕路

4 遙拂九仙衣

5 桑柘凝寒色

6 松篁暗晚暉

7 還當紫霄上

8 時接白雲飛

9^b 瑞氣凌青閣

10^b 煙 156

迴浮雙闕路

迴浮雙闕路

時接彩鸞飛

時接彩鸞飛

時接彩鸞飛

時接彩鸞飛

10^c 瑞氣凌青閣

煙 340b

迴浮雙闕路

迴浮雙闕路

桑柘迎寒色

時接彩鸞飛

時接彩鸞飛

時接彩鸞飛

時接彩鸞飛

隱瑞氣丹闕を凌ぎ空濛として翠微に上る 迥かに雙闕
 の路に浮んで遙かに九仙の衣を拂む 桑柘は寒色を凝
 らし 松篁は晚暉を暗くす 還て紫霄の上方に接す
 白雲の飛ぶに

6^a ● 瑞氣凌丹闕 瑞氣はめてい雲氣、偕書大丈志瑞氣

一 曰慶雲若遊非遊若雲非雲郁郁紛紛蕭索輪

園是謂慶雲亦曰景雲此喜氣也 冬參照 丹闕は

赤塗の工宮の門 丹闕は赤く塗に樓閣 唐太宗鐘

緯試切瑞一作王氣凌丹闕 祥雲散碧空 公唐詩

二 青閣 朝廷といふ 南齊王融 永明樂振玉 驪丹崖

懷芳步青閣 公濟詩 劉宋顏延年 道陵宮洛陽

尚書 述聖 青閣 皓月臨丹宮 文選 三 青閣

は皇太子の宮殿 句意は めてい氣が工宮の門高くたろ

ばっている。

62 ●空濠上翠微 空濠は小雨が降って薄暗いようす、南齊

謝朓 觀朝雨詩 空濠如薄霧散漫如輕埃（全齊

詩三）翠微 もとの意であるが、こゝでは唐の太宗の作て山

の難字をい、唐書白閣山德受記に翠微宮及玉華宮

（御覽一七三宮）句意雨煙が薄暗くかすんで翠微宮の上にた

ちのほてゆく、（補唐武元衡嘉陵驛詩 悠悠風旆遠山

川、山驛空濠雨似煙（全唐詩三七）▲風旆風にながそ

う旗。

63 ●迥浮雙闕路 迥は迥の俗字、とあい、迥は廻と同じ月

じ、めぐら、雙闕は宮門の兩側にあって上に樓觀のある臺、

崔豹古今注闕觀也、古每門樹兩觀於其前所以

標表宮門也、其上可居登之則可遠觀、故謂之觀、

人臣將朝至此則思其所闕多少、故謂之闕、其上

皆丹雘、其下皆畫雲氣仙靈奇禽怪獸、以昭示四

方、焉蒼龍闕畫蒼龍、白虎闕畫白虎、玄武闕畫玄

武、朱雀闕上有朱雀二枚、（卷中）繩文帝歌長安城

西有雙員闕、上有雙銅雀、一鳴五穀生、載鳴五穀

熟（御覽一〇九闕）庾信詩和同泰寺浮圖詩長影

臨雙闕、高層出九城（全北周詩三）

64 ●遙拂九仙衣 九仙は九種類の仙人、上仙高仙天

仙元仙天仙真仙神仙靈仙至仙（雲笈七籤）列

仙傳上涓子者齊人也、受自陽九仙法、流

約早發定山詩敬言採三秀徘徊望九仙（全梁詩

四）句意は遙かに（煙は）九仙の衣を拂う、列仙傳上

甯封子甯封子者黃帝時人也、甯封子能出五色

煙

65 ●桑柘凝寒色 桑柘はくわとやまの 周禮夏官司燧
 常行火之政…注鄭司農說以穀子曰…李夏取
 桑柘之火(卿禮ハ六火)齊謝朓宣城郡內登望
 詩切切陰風暮桑柘起寒煙(藝文部)凝は沁
 義抄法上四六コリス、ハム寒色、さびし、景色、句意は桑
 柘の煙は寒々として色をとめてゐる。

66 ●松篁昭晚暉 松篁は松と竹、氷經河水注列植松
 篁于池側、唐張九齡《洞簫賦》、經山經王泉山寺詩
 稍稍松篁入、冷泠澗谷流、晚暉はゆうひ、梁簡文帝
 詠連曲晚日照空廡、採蓮承晚暉、

67 ●還路留紫霄上 還はおぐく意(江傳修分ナ五平注)紫
 霄は大空、青霄と云、紫霄ともいう、また王宮をいう、南史

字子嶠百廿詠注 煙露

朱彤傳介紫霄之丹地排玉殿之金扉、句意は煙
 はめぐって紫霄(王宮)の上をまわつ。

68 ●時掖日雲飛(煙は)時には日雲の飛ぶにまじつてたは
 る、劉向《雲璈》銘中有蘭闥、朱火青煙、尉術四塞上、
 連音雲(初ニム連雲)▲蘭闥、蘭闥、んと蘭音、▲尉術
 かんにのべんから、漢武帝、秋風辭、秋風起兮白雲飛、草
 木黃落兮鷹隼歸、(文選四ナ五)彩鸞鳥、いんどうの美し鸞

山經、女媧之山有鳥焉其狀如鸞而五彩、文、名
 曰彩鸞、佩文韻府、十四彩鸞、今本鸞鳥とす、梁江淹
 雜體、班婕妤詠扇詩、綵扇如圓月、出日機中、漆
 畫作、秦王女乘鸞、何煙霧、彩色、世所重、(文選三ナ)

▲秦王女秦の穆王の女弄玉をい、(列仙傳)蕭史)

1
 露 隠
 1a
 滴 瀝 明 花 苑
 風 蕤 法 竹 叢
 3 玉 垂 丹 棘 上
 4 珠 連 綠 荷 中
 5 夜 警 千 年 鶴
 6 朝 晞 八 月 風
 7 願 凝 仙 掌 內
 8 長 奉 未 次 宮
 匠 高 邇 應 之 花 苑 に 明 かに 蕤 蕤 として 竹 叢 に 法 する 玉
 は 垂 ち 丹 棘 の 下 珠 は 湛 ふ 綠 荷 の 中 夜 は 警 言 せ 千 年
 の 鶴 朝 に は 晞 る 八 月 の 風 に 願 へ は 仙 掌 の 内 に 凝 め て
 長 く 未 次 宮 に 奉 ぜ む
 b
 露 路 156
 c
 露 340b

1
 露 隠
 1a
 滴 瀝 明 花 苑
 風 蕤 法 竹 叢
 3 玉 垂 丹 棘 上
 4 珠 連 綠 荷 中
 5 夜 警 千 年 鶴
 6 朝 晞 八 月 風
 7 願 凝 仙 掌 內
 8 長 奉 未 次 宮
 匠 高 竊 應 之 花 苑 に 明 かに 蕤 蕤 として 竹 叢 に 法 する 玉
 は 垂 ち 丹 棘 の 下 珠 は 湛 ふ 綠 荷 の 中 夜 は 警 言 せ 千 年
 の 鶴 朝 に 晞 る 八 月 の 風 に 願 へ は 仙 掌 の 内 に 凝 め て
 長 く 未 次 宮 に 奉 ぜ む
 1b
 露 路 156b
 c
 露 340b

何の造營した宮殿、漢書高帝紀（晉葛洪西
 京雜記）漢高帝七年蕭相國營未央宮、因龍首
 山製前殿、建北闕未央宮、周廻二十二里、九十五
 步、五尺、街道周廻七十里、臺殿四十二、其二十二
 在外、其一、一、後宮、池十二、山六、池一、山一、亦、在
 後宮、門闕凡九十五、漢書元康元年、甘露降、未央
 宮、大赦、以甘露連降、改年爲甘露（漢九十八甘露）
漢書宣帝詔曰、甘露降未央宮、（初甘露降宮）
漢の武帝の承露盤は建章宮の神明殿にあり、未央宮
 は建章宮より見下す位置にあった、三綱實圖三建章
 宮にふると神明臺、漢書曰、建章有神明臺、漢記
 曰、神明臺武帝造、祭仙人處、上有承露盤、有銅仙
 人、舒掌捧銅盤、玉杯、以承雲表之露、以露和玉屑、

李嶠百廿詠注 雲路 露務

服之、以求仙道、とあり、未央宮に甘露が降ったのは宣帝
 の時で、こゝではこの時の故事をいっているのである。句意は本
 長く甘露を降らせて未央宮に奉仕したいものである。

8 露務 曉

1^a 昔ハム之夢澤

之 一作迷

3^c 昔ハム迷楚澤

2 漢帝出平城

3 別有丹山霧

4 玲瓏素月明

5 類烟霏稍重

6 方雨散還輕

7 儼入非熊繇

8 寧思玄豹情

露務 曉

非 一作飛

類烟飛稍重

倚入非熊繇

倚入非熊繇

倚入非熊繇

倚入非熊繇

倚入非熊繇

倚入非熊繇

倚入非熊繇

倚入非熊繇

倚入非熊繇

(註)昔公ハ陽澤に之キ、漢帝は平城を以テ別ニ丹山
 の霧あり 玲瓏として素月明ハカセリ烟に類テ事非として俗
 重ク雨にガテ散テ還リテ輕ク儼非熊の跡に入ラハ
 寧ンチ豹の情ヲ思はんヤ

81 ●昔公之夢澤 魏の昔公操が赤壁の戦いに敗れ雲夢の大
 澤中に行き大霧にあり道に迷ったといふ故事にもとづ。漢
 雄記 昔公ハ赤壁之役行キ雲夢大澤中ニ過大霧ニ
 迷失道ニ魏ニ雲霧入御ニ雲霧引王象策決雄記曰昔公ハ
 赤壁敗行雲夢大澤中云々夢澤は雲夢大澤澤同
 〃古昔湖北省安陸縣の南にあつたといふ二澤、諸説
 ありて一定せず。楚澤は上に同じ。湖北は古の楚の地。
 82 ●漢帝出平城 漢の高祖七年冬、高祖は韓信と數キ
 平城に至つたが、匈奴に圍まれタこと七日、大霧に來じて

平城の難を免れることのできたといふ故事、漢書韓信傳
 漢高祖至平城匈奴圍上七日、天大霧、漢使入還
 往胡不覺、後得見平城之難、(御備ニミ務)高帝
 七年冬、上自往擊破信軍、銅鞮：上遂至平城上、
 白登、匈奴騎圍上、上乃使人厚遺閼氏、閼氏欲留
 輓曰、今得漢地、猶不能居、且兩王不相親、居七日
 胡騎稍引去、天霧、漢使入往來、胡不覺、胡不覺、
 護軍中尉陳平言上曰、胡者全兵、(注)奇日言、
 唯引不、無雜仗也、請令價弩傳兩矢、外鄉、(注)師
 古曰、每一弩而加兩矢、外鄉者以微敵也、徐行出
 圍、入平城、漢救兵亦至、胡騎遂解去、(漢書韓信傳)
 ▲平城 漢の雁門郡今の山西省大同縣の東にあつた
 地、▲銅鞮 今の山西省沁縣の西南の地、▲閼氏 匈奴

の單干の妻▲冒頓匈奴の單干の名▲殢奴つよいしゆ

83 ●別有丹山霧 丹山は宜都郡(今の湖北省宜都縣)の西北にあって丹砂を産する山。晉袁山松宜都山

川記郡西北有丹山。天晴嶺忽有霧。霧起迴轉如煙。不遇丹期。雨必降。(嶺ニ霧) 涿野は涿鹿をいふ。河北

省涿鹿縣の東南にある野の名。黃帝と蚩尤が戰つた故地。古今今は黃帝與蚩尤戰於涿鹿之野。蚩尤作

大霧。(初ニ霧) 涿野(秋氣は蚩尤の起す不祥の氣霧) 玲瓏素月明 玲瓏は月がこえてあざやかなさま。梁沈約

登雲望秋月詩 入青瑣而玲瓏。(玉臺新詠九) ▲青瑣は青瑣門。素月は白

光の月。劉宋謝莊月賦 白露路曉空素月流天初

李嶠百廿詠注 霧

一) 朦朧は月のおぼろかなさまをいふ。朦朧をいふ。晉潘岳

秋興賦 月朦朧以含光。今露澤凄清以凝。含風以

朦朧は月が初めて出よつとするとまのやちをいふ。朦朧は眼に

障。障色眉は瘡の誤りか。瘡はかすんだ色。にては霧

でかすんだ色。委齊は晴れる。朗らかな意。

85 ●類烟垂稍重 類烟とは烟に類する意。梁孝元帝

詠霧詩 似遊塵乍若飛煙散。梁伏挺行舟

畫早發詩 水霧雜山煙。冥冥見曉天。(以上蘇二

詩 李孝注非雲飛貌) 句意は霧務あがるときは

烟の飛ぶに似てゐるがや重く感じる。83 山川記參照

86 ●方雨散還輕 方はあたりの意。白義抄 僧中ニミク

87 ● 儻入非熊 繇 周の文王が獵をするにあたり、太史の繇

いふ故事にもとづく。儼儼名義抄名義抄佛上ニナ一タマフ。六八六八船

1. *Journal of the American Medical Association*, 1997; 277: 1033-1038.

▲三王文王・武王・成王三代 ▲皋陶 舜の臣、法理に

蒙亦上呂望生非熊。

<p>ばかりが増えたので能薄くて官位が大さなれば害にかなる所なくして家が歸へなれば死を積むといつて南山の玄豹の故事を引いて説いた話にもとつて。列女傳賢明傳陶大夫答子妻也。答子治術三年名譽不興家富三位皆其妻歡識不用。婦曰持子能薄而官大是謂解安害無功而家富是謂積歿昔望令尹子文之治國家貧國富君歟民歟故種結于子孫名傳于後世今夫子不然貧富致大不願後室妾聞南子有玄豹鬻爵七日而不下食者何也欲以潔其身而成人之微見笑。鍾曰答子治術家富二位毒謀不聽知其不潔獨泣始怒送厥母家答子逢禍復歸養</p>	<p>姑へ初ニ希希豹隱又節錄之へ句意は87を受け太公望のように立身出世して身の危険にさられるかも知れぬ状態よろも玄豹が身を藏して害を遠くけようとする氣持にが引かれるのである。(補)廣志 豹有赤豹南山有玄豹南多赤豹狐死首丘豹死首山是性之異也詩義續曰毛赤而文黑謂之赤豹毛白而文黑謂之白豹也孫氏補德圖文王拘於羑里散宜生於懷塗山得玄豹以獻紂死西伯之難(以上御覽八九二豹)</p> <p>9 雨 1a 西北雲膚起 2 東南雨足來 3 靈童出海見</p> <p>b 雨 1b c 雨 3ab</p>
---	---

題
4 神女向山廻

5 斜影風前合

6 圓丈水上開

7 十句無破塊

8 九土信康哉

(述)西北に雲の廬起つて東南に雨の足來る 雲霞重
は海を出て見 神女は山に向つて廻る 斜さる影は風の
前に合へり 圓さる丈は水の上へに開く 十句までに塊を破
ること無く 九土信に康いかな

9.1 ●西北雲去廬起 西北 8.3 宜都山川記 參照 雲去廬

されがれの雲の集り、廬は指四本をならべに長さゆづりをも

のたとえ、春秋ハク羊傳 僖公三十一年 觸石而出 廬

寸師合、不崇朝而徧雨乎天下者、惟泰山焉、(初雲引)

▲觸石 石によれり、泰山の雲は石によれて出るといふ、▲廬

寸而合 されがれの雲が集りあつこと、晉 潘元若 雨賦

氣觸石而結、燕公、雲去廬合、而仰浮、雨紛射而下注、

分、(述ニ雨) 句意は西北に雲がより集り起つて、

9.2 ●東南雨足來 東南といふのは、9.1で西北といふものと

受けてゐる。雨足 雨が亦すゝのよに降るの意といふ、晉 張

協 雜詩 騰雲似、湧煙密、雨如散、絳、又發、結、繁、

雲、森、森、散、雨、足、又雲根臨、八極、雨足、灑、四、溟、以、

上、汶、選、三、九、▲八極、ハ方のはて、▲四溟、四海に同じ、

句意は東南にむかつて雨足がやってくる。

9.3 ●靈童出海見 靈童は仙人に仕える童子、仙童、

玉童ともいう、こゝで神異經いうところの河伯の使者に

仕える十二童子をいふ、神異經 西荒經 西海上有、

神女向臺回

入馬乘白馬朱鬣白衣素冠從十二童子騎馬
西海上如飛名曰河伯使在其所至之國雨水滂
池(洞漈上雨)▲滂池大雨の降るま。句意は雲霧重重が
海上に女を現わし大雨を降らせている

●神女向山廻楚の襄王の父懷王が雲夢の臺に遊び夢
て神女と枕をもちたという故事にもとく宋玉高唐賦
昔者楚襄王與宋玉遊於雲夢之臺望高唐之觀
其上獨有雲氣徘徊兮改容須臾之間變
化無窮王問玉曰此何氣也玉對曰所謂朝雲者
也王曰何謂朝雲玉曰昔先王嘗遊高唐台志而畫
寢夢見一婦人曰妾巫山之女也爲高唐之客聞
君遊高唐願爲枕席王因幸之云離別妾在巫山
之陽高丘之阻此爲朝雲暮暮爲行雨朝朝暮暮陽

李嶠百廿詠注 雨

臺之下朝視之如言故爲立廟號曰朝雲如此狀
者何玉對曰其少進也明今无故娥揭袂障日而
望所思思兮改容賜兮若石駕騶馬而建羽旗秋兮
如風凄兮如雨風止雨霽雲無處所惟高唐之大
體殊無物類之可儀北▲巫山之女巫
山之神女赤帝之女の娥姫をいふ巫山に登る前に死に
たので巫山の陽に葬った文選李善注襄陽者舊傳赤
帝女娥姫未行而卒葬於巫山之陽故曰巫山之
女王因幸之遂爲置觀於巫山之南號爲朝雲後
至襄王時復遊於高唐赤帝は九天帝の一で南方
の神夏をつかさどる觀は道教の寺院をいふ巫山の故事に
かり男女の情事を巫山といふ漢の樂府に巫山高がある
また巫山之雨巫山之雲巫山之夢等の語がはまはれた

▲薦枕席 まぐらと敷きのすむれらねどこをすめる。夜の側を
する意 ▲偈 李善注疾軀貌 ▲羽旗 李善注成五色
鳥羽。縁之。句意は神女は止に向つて朝は雲とす。音は
雨となつてしまひてゐる。

95 斜影風前合 斜めにさする影は風の前で合はつてゐる
ことをいふ。梁王僧孺春日寄卿友詩翠枝斜景
綠水散圓文(注梁簡六)

96 圓文水上開 圓文は水の波紋 95 王僧儒詩參照
句意は圓い波紋が水の上に開く。前句の斜影を斜めに
降る雨足とし、圓文は雨が水の上に落ちてできた圓い波紋
と考へることも可能である。

97 十句無破塊 十句は百日。一句は十日。破塊とは
暴雨が田畑を破り害すること。後漢桓寬鹽鐵論水

早雨不破塊 風不鳴條 句而一雨雨必以夜無仰
陵高下皆熱 周亮工注 董仲舒曰太平之時雨不
破塊 漢書 而己(注雨潤葉)後漢王充論
衡是應 太平瑞應 風不鳴條 雨不破塊 立日一
風十日一雨(注九十八祥瑞)句意は十句もほどよい
天氣が續き、雨が塊を破ることもよい太平の世である。

98 九土信康哉 九土九州すなわち中國、いわゆる南貢
にあり九州である。康哉 やすくてあるよ。言經 虞書 益稷

に舜が皋陶と唱和した歌があり、聖王と賢臣が相戒め徳
ある治政をふし勧めることを歌っている。帝庸作歌曰 敎天
之命 惟幾 乃歌曰 股肱喜哉 元首起哉 百工
熙哉 皋陶拜手稽首 颺言曰 念哉 率作興事 慎乃
憲 欽哉 虞 虞 虞 欽哉 乃唐書 元首明哉 股

脇良哉^{よし}庶事^{しよじ}康哉^{かうがい}又歌曰^{またうたひて}元首^{えうしゆ}業^{わざ}黜^{ちて}股肱^{こたつ}情哉^{じやうがい}
 萬事^{ばんじ}墮^お哉^{がい}帝^{てい}拜^{はい}曰^{いふ}俞^ゆ往^{わう}欽^{きん}哉^{がい}▲[▲]惟^い時^じ惟^い幾^き時^じと^と戒^{かい}
 めつゝまといこく事として戒めつゝまといこはせい▲[▲]股肱^{こたつ}臣^{しん}
 をい。▲[▲]元首^{えうしゆ}をい。▲[▲]起^{おこ}君^{きみ}の治^ち功^{こう}をい。▲[▲]百^{ひやく}工^{こう}配^{はい}
 百官^{ひやくくわん}の業^{わざ}績^{せき}が康^{かう}かりあがる。▲[▲]阜^ふ南^{なん}陽^{やう}の臣^{しん}。87注参照。▲[▲]颺^{はら}
 言^{こと}大聲^{だいせい}で早^{はや}口^{くち}に言^{こと}うこと。帝^{てい}の歌^{うた}を承^{うけたま}けて帝^{てい}を戒^{かへ}めるのであ^らう。
 ▲[▲]率^{すう}群^{ぐん}臣^{しん}を率^{すく}いること。▲[▲]作^{さく}興^{きやう}ふるいおこす。▲[▲]乃^{すなは}憲^{けん}君^{きみ}たをべ
 き法^{はふ}度^ど。▲[▲]乃^{すなは}成^{せい}汝^にの功^{こう}績^{せき}がよであるが。▲[▲]膚^{はだ}黜^{ちて}けて。▲[▲]載^{さい}成^{せい}
 す。▲[▲]叢^{そう}脰^{じゆ}細^{さい}事^じに心^{こころ}を碎^{くだ}いて大事^{だいじ}を疎^そ略^{りやく}にする。句意は
 中國^{ちゆうごく}は舜^{しん}と皋^{こう}陶^{たう}の應^{おう}答^{たふ}歌^かである康^{かう}哉^{がい}之^の歌^かの治^ち世^{せい}の
 ようにまこといせうらかにせよ。

予^よ嶠^{きやう}百^{ひやく}廿^{にふ}詠^{ぎやう}注^{しゆ} 雨^う 雪^{せつ}

10 雪^{せつ} 遶^{たう} 瑞^{ずい}雪^{せつ}驚^{きやう}千^{せん}里^り 1a 雪^{せつ} 遶^{たう} 瑞^{ずい}雪^{せつ}驚^{きやう}千^{せん}里^り
 2 從^{じゆ}風^{ふう}暗^{あん}九^く霄^{せう} 2 從^{じゆ}風^{ふう}暗^{あん}九^く霄^{せう}
 3 地^ち疑^ぎ明^{めい}月^{げつ}夜^や 3 地^ち疑^ぎ明^{めい}月^{げつ}夜^や
 4 山^{さん}似^に白^{はく}雲^{うん}朝^{あす} 4 山^{さん}似^に白^{はく}雲^{うん}朝^{あす}
 5 逐^{しやく}舞^ぶ花^か光^{かう}散^{さん} 5 逐^{しやく}舞^ぶ花^か光^{かう}散^{さん}
 6 臨^{りん}扇^{せん}影^{えい}飄^{ひょう} 6 臨^{りん}扇^{せん}影^{えい}飄^{ひょう}
 7 大^{だい}周^{しゆう}天^{てん}闕^{けつ}路^ろ 7 大^{だい}周^{しゆう}天^{てん}闕^{けつ}路^ろ
 8 今^{こん}日^{じつ}海^{かい}神^{しん}朝^{ちやう} 8 今^{こん}日^{じつ}海^{かい}神^{しん}朝^{ちやう}
 遙^{えう}瑞^{ずい}雪^{せつ}千^{せん}里^りに敬^{けい}慕^ぼき 風^{ふう}に從^{したが}つて九^く霄^{せう}に暗^{あん}し 地^ちは明^{めい}月^{げつ}
 の夜^やかと疑^ぎひ 山^{さん}は白^{はく}雲^{うん}の朝^{あす}に似^にたり 舞^まを逐^{しやく}ふて花^かの光^{かう}散^{さん}
 び 歌^かに臨^{りん}んで扇^{せん}の影^{えい}飄^{ひょう}へら 大^{だい}周^{しゆう}天^{てん}闕^{けつ}の路^ろ 今^{こん}日^{じつ}海^{かい}
 神^{しん}朝^{ちやう}するも 10a 統^{とう}は誤^ご寫^{しやう}と考^{かう}えらるゝて内^{ない}閣^{かく}文^{ぶん}庫^こ本^{ほん}に

したかい訂正した。
101 ●瑞雲敬萬千里玉 瑞雲 へてたい雲 冬の雪は豊年のキギと

して喜ばれた。陳張正見玄圃觀春雪詩 同雲遙映嶺。
瑞雲近（全陳詩） 道居書 武后久視二年都
城二月朔雲鳳閣侍郎蘇味道以爲瑞雲幸百官
表賀左拾遺王求禮曰若以二月雪爲瑞雲即臘
月雷亦爲瑞雲（卿文選有之） 八瑞雲 ▲久視二年
則天武后の年號西紀七〇一年。このことについて、唐劉肅
の次唐新詔九訣に次の文がある。則天朝當二月降
雪鳳閣侍郎蘇味道等以爲祥瑞。草莽將賀左拾
遺王求禮止之。求禮曰。宰相不能變理陰陽。令
二月降雪。此災也。乃誣爲瑞。若三月雪是瑞。雪臘
月雷當爲瑞。雷耶舉朝喜之。遂不賀。 ▲鳳閣侍郎

唐代中書省の尚書を輔佐する官。 ▲臘月十二月の異
名。 ▲變理やわらけ治め。 劉宋・謝惠連雪賦 盈穴則
則玉瑞於豐茸。 瑞三雲 千里 はわかに遠く廣いまわ
りの地。千里四方をいう。 陳詞 堆冰我試飛雪千里。 絢
ニ雪千里雲。 飛雲千里。 ▲飛雲千里。 王逸注。 涼
風急時。 疾雲隨之。 飛行於千里。 乃至地也。 句意は
めでたい雪が降って千里四方の人々を敬慕させた。
102 ●從風暗九霄 九霄 はおそく、天の九つの分野をい

るときに神霄青霄瑤名霄丹霄景霄玉霄飛霄紫霄太
霄をいふ。 晉庾闡衛山詩 翔遊九霄。 陸綸 因濡沫
（金吾詩） 又（衛山） 孫綽聖人高士傳讚原憲
志。 九霄身安。 謝朓（任潛） 六十二句意に雪は風に
たがって大空に舞いより大空を照くおとっている。 同雲は垂と

定豫の南。▲六出雪の異名、雪の結晶が六瓣の花に似てゐからう。▲九光美しうかき。▲銀輝銀色のうし。銷は消える意。玉馬などの句意は玉馬のうすまていた。という地の雪はさわりを圍むように消えている。

10.5 逐舞花光散 逐舞は風の舞うのも雪が追う意。魏曹植各神賦 騁驚兮若輕雲之蔽月 飄飄兮若流風之迴雪 (又選十九) 花光 雪花の光。陳後主梅落 花光動迎風香氣來 (全陳詩二) 句意は風の舞うのも追うて雪花かと散る。

10.6 臨歌扇影颿 班婕妤の臨歌行によって作られている。臨歌の詩は扇を女性にたとえ夏の暑、時には大切にされろが涼風が吹き出すとち捨てられてかえりみられないに才色兼備の班婕妤が漢の成帝の愛寵をほしいままにならず趙

飛燕の出現により愛を失い非遇をかくようになったことがわかってこれにもとづいたものである。す嬌が詩を作っていたのはすくなくともそう考えられていたが後世では詩の作者を冠するにあらわある。漢班婕妤好扇詩 新刻鐵片 鈔本 鮮絮如霜雪裁成合歡扇 團圓似明月 出入君懷袖 動搖微風 殘常孤心 秋節至涼 應奪炎氣 痛捐適寄中思情中道絶 (選十九) 扇たし、雲、論樂では臨歌行と題す。は選ニ下同) ▲齊紉素齊 (山東省) と水色白いなり絹。▲鮮絮 李善注故絮とす。▲合歡扇 合れやうちれ鴛鴦の模様がゆどうあるは拙いである。骨に絹を両方から張り合わせ情愛深く離れなことを願った。形は丸くなっている。▲涼颿 涼しい風。李善注涼風とす。▲送寄衣類ともまう箱。臨歌 歌にやんで鮑照園中秋微詩 臨歌不知。

調發興誰與歡（途次緒四）句意は歌の席に臨んで
 いち捨てられた扇がひらひらと舞っている。にぎやかな歌聲かと
 こからか聞えてくる。居い時にはけさやかな歌聲の中へ空響く
 小た扇もろろ捨てられてかえりみられず、むすく風にながそいで

うさを詠じたもの。

12 ●大周天關路今日海神朝周の武王が殷の紂王を
 伐とつとたとき、都の洛邑の空は寒色につまれば雪が十日餘
 も降り續き一丈餘りも積った。甲子の朝、九大夫が二騎
 を従へ五輅の車に乗って門前にやってきていった。王をたすけて
 紂をうたんと去つたあとには車馬の跡はなかった。海神が天の
 使としてやってきたのである。この故事にもとづき作られたものである。
 金匱（ハハ）金匱（武王伐紂都洛邑未成陰寒大雪
 深丈餘甲子旦不知何五大夫乘馬車從兩騎止

李淹百廿詠注 雪

門外王使大帥（謝安）尚父（謝安）臨之尚父使人持一
 器（彌）出進五車兩騎（軍使）者具（以告尚父）曰五車
 兩騎四海之神（與）伯雨（伯雨）師耳尚父各以其名進
 之（五神皆驚）相視（前）嘆（綴）雪大餘雪
 太公伏符陰謀武王伐紂都洛邑天大陰寒兩雪
 十餘日甲子朝五車騎止王門之外（祝武王）師
 尚父使人出北門而道之曰天子未有出時武王
 曰諸神各有名字師尚父曰南海神名祝融北海
 名玄冥東海神名句芒西海神名蓐收河伯名馮
 修（伐）謁者各以名召之神皆驚而見武王王曰何
 以教之神曰天伐殷立周謹來受命各執其使武
 王曰予歲時亦無廢禮焉（初）雪周闕（句意は）
 大周（周）の美樹と天門との路はながてあり今日海神

“壺の中を來朝した。參考に祝融・立行の神の二南方の神、
 熒子・立行・黃帝得祝融、辨於南方。漢書揚雄傳
 麗鉤芒與驂轡收兮、服玄冥及祝融（注）鉤芒東
 方神、驂轡西方神、玄冥北方神、祝融南方神、立行
 の神は上記のほかに后土（中坎をくさどる）を加え、（左傳
 昭ハ二十九耳）